【座談会】「旅と持続可能性」1

観光の持続可能性を、旅をする立場から考えると、今、どのような課題があるのだろうか？
それに対して旅行者にできることは何か、受け入れる側がすべきことはどんなことか。３人の旅の達人に問う。

北海道博物館　館長　石森 秀三
フリーアナウンサー　青山 佳世
紀行作家　シェルパ斉藤
［進行］
理事・観光地域研究部長　寺崎 竜雄

「旅」との関わり

――今日はこれまでの旅の経験をもとにして「旅と持続可能性」をテーマにお話しいただきたいと思います。まずはご自身の旅との出会いや関わりについて、お聞かせください。

青山　私の旅の始まりは１９９０年代にＮＨＫで旅番組を担当したことです。当時の日本ではまだ観光スポットを巡る旅が主流でしたが、その番組は観光地としては全く無名の町や村を訪ね、道すがら出会った人たちと会話しながら、その土地ならではの暮らしぶりや宝物を紹介するというものでした。

もちろん楽しむ旅、癒やされる旅もいいですが、私はその番組を通じて旅本来の面白さとは自分ならではの発見や出会い、気づきがあることだと感じました。観光の語源にあるように、「旅とはその土地の『光』を観て歩くこと」だと講演会などではお話ししてきました。

当時は、人との出会いや気づきを目的に観光地ではないようなところに行く旅は、ビジネスにならないと観光産業からは相手にされていませんでした。一方で、中山間地では都会の人との

青山佳世（あおやま かよ）
フリーアナウンサー。愛知県生まれ。商社勤務からフリーアナウンサー。1989年からNHKの生活情報番組や報道番組を担当し、おはよう日本「季節の旅」では5年間、226カ所を旅する。これまで国土交通省交通政策審議会委員、観光立国懇談会委員、林野庁林政審議会委員、現在は人事院国家公務員倫理審査会委員、企業の社外取締役、団体理事などを歴任。著書に『旅で見つけた宝物』

交流が重視され始めた頃でしたが、「観光」という言葉に地域の人たちはすごく拒否反応を示していました。「自分のところは観光地ではないから、来られても困る」という反応が多かったです。

しかし２０００年代に入ると、グリーンツーリズムや産業観光などの新しい観光が生まれ、今では地域の人と出会うようなさまざまなかたちの旅を多くの人たちが楽しむようになり、大変嬉しく思っています。

石森　私は東京オリンピックが開催された１９６４年（昭和39年）に大学に入学しました。日本が世界に門戸を開いた頃です。私も外国に憧れを持ち、大学2年の時に文明学者の梅棹忠夫先生と出会ったことから、文化人類学を志しました。

大学卒業後は１９６９年にニュージーランドに留学して先住民族のマオリについて研究。その後、研究対象をミクロネシアに移し、32歳の時に電気も水道もないサタワル島に1年間滞在して、ふんどし一本でフィールドワークをしました。島の人々の心豊かな生き方を知って、近代文明の至らなさを感じました。

１９８０年代に南太平洋の島々を訪れる機会があり、観光のインパクトを実感しました。観光は様々なインパクトを生みだしますが、「負のインパクト」を生みだしがちです。「負のインパクト」を最小限にして、観光が本来有している良い面を活かす必要があります。観光は本来ホストとゲストの双方を幸せにして地域活性化に貢献できる営みです。そういう現実を目にして、このままではいけないと危機感を覚えたのが、観光研究者にシフトしたきっかけです。私はいま「観光創造学」の推進を図っています。

斉藤　僕は大学卒業後に何をしたらいいか分からず、「悠久なる大河を下れば何か見えるかも」と思い、在学中に揚子江をゴムボートで下る旅をしたんです。お金がなかったのでメーカーにゴムボートの提供を頼みに行ったら、「宣伝のために旅行記事を雑誌に書いてくれ」と言われ、書いた記事がアウトドア雑誌『ＢＥ−ＰＡＬ（ビーパル）』に掲載されたら好評で、卒業後は就職せずにそのままフリーランスのライターになりました。

その後は忙しくなって自由な時間がなくなったので、仕事をリセットし、もう一度好きなように旅をしようと自転車でアジアを巡り、ヒマラヤのふもとも歩き回りました。そして帰国したら、『ＢＥ−ＰＡＬ』から今度は「東海自然歩道を全部一人で歩いて連載をしないか」と言われました。

それは東京から大阪までを結ぶ全長１６９７㎞の自然歩道で、今でいうロングトレイルです。毎月書くネタがあるのか不安でしたが、歩いてみると次から次へといろんな出会いがあり、書くことには困らなかったんです。

それまでは、遠くに行くほど素晴らしい感動が待っていると思っていたのですが、「遠くに行かなくても、発見って身近なところにあるんだ」と気づいて、それから歩く旅が面白くなりました。

東海自然歩道を全部歩き終わった後も、歩く旅の連載は28年くらい続いています。ここに行けばこういうことがある、ではなくて何が起きるか分からないのが楽しくて飽きないんです。僕は「歩く旅は特別の装備も要らず、誰でも楽しめて、その人にしかできない体験ができる」と一貫して言っています。

インバウンド急増の「影」

――近年、観光は地方創生の手段とし

ても注目されていますが、そのことが持続可能な観光に何らかのインパクトを与えていないでしょうか。「持続可能な観光」の概念はさまざまですが、旅人目線から持続可能性を捉えた場合、今はどのような課題があるとお考えでしょうか。

青山　地域を訪れる人が増え、店が増えたり、町並みの保存に投資が行われたり、町が活性化されてよくなった町がある一方、急増した観光客の数を維持するために、町にとって必然性のない施設を誘致するなどして本来の魅力を失ってしまうケースもあります。目先の入れ込み客数の増減に躍起になるだけではなくて、時間をかけてその土地の魅力を持続的に磨くことも忘れないでほしいですね。訪れた人が満足できるよう、バスなどの交通、宿泊、おもてなしなど受け入れ態勢を整えることにもっと目を向けてほしいですね。特にこの数年でインバウンドが急激に増えたことで、壊れつつある地域もかなりあるのではと危惧しています。

石森　私は北海道に住んでおり、昨年は230万人の外国人が北海道を訪れました。中でもニセコを訪れるインバウンド客数は大幅に増え、不動産を買う外国人も多くなり、地価が上がっています。ニセコ町役場はRESAS(注)を使って本当に「観光で稼げているのか」という調査を行いました。本当に稼げていれば町の財政力指数も上がり、町民所得や町内企業の収入も上がるはずです。しかし調査の結果、明らかになったのは「観光で稼げていない」ということでした。数多くの観光客は来ているけれども、現実に訪れる人をもてなしているのはローカルコンテンツよりも、町外の食材や商材が持ちこまれているわけです。したがってお金が落ちても外部に流出するので、結果としてニセコ町の財政力は上がらず、町の企業や町民所得も上がっていないということです。

――旅人目線から観光の持続可能性を捉えるとどうでしょう。

石森　僕が個人的に今感じているのは、旅行するのがだんだん煩わしくなっているということです。JRの特急や飛行機、ホテルも含めどこも外国人でいっぱいで予約も取りにくくなっているんですね。こういう状態が続くと、北海道の人たちが旅行しなくなるのではと危惧しています。

斉藤　僕は毎月1回、山に登っていますが、石森先生が言われた状況は日本の山でも起きつつあって、北アルプスでもいろいろな山にアジアの方たちがどんどん入ってきています。問題だなあと思う一例は、彼らが山小屋で話す声が大きいことです。

　これはマナーの問題ではなく常識や生活習慣の違いだと思いますが、日本人は静かな環境を求めて山に来ているのに、そこに外国人の団体がどっと来て大きな声で話していたら、「もう行きたくない」と思ってしまうかもしれない。異文化を持つ人たちがたくさん入ってくるというのはそういうことだ、と受け入れる側も、もう少し意識すべきだと思います。

　今後はさらにインバウンドを増やすと言っているので、そういう意味では自然保護の観点からも、前もって対策と方向性をしっかり考えておくべきで、ただ誘致するだけではいろいろ弊害が出てきてしまうのではないでしょうか。

青山　かつては自治体がお金を出して外国の方を日本に呼んでいましたが、今はそういうことをしなくても口コミで広がり、大勢の方が来るようになりました。それはいいことですが、とにかく何でもいいから来てくれという時代はもう終わっていて、日本の生活習慣やルールを伝えた上で楽しんでくださいと言う必要があると思います。

石森　山も収容人数の容量が限られていますし、北海道でも公共交通機関や宿泊施設の容量が限られています。いまは、世界的に「反グローバル化」や「グローバル疲れ」のような現象が見られ、ヨーロッパでは行き過ぎた観光振興に対してデモが行われるなど、「反観光」の動きが生じています。

　日本ではそこまで過激な反応は生じていませんが、静かな山を楽しめないなら登山はやめておこうとか、わずらわしい旅行はしたくないなど、ネガティブな反応が出てくることは考えられます。インバウンドに関しては、日本はこの5年で急激に変化したので、変化に社会が追いついていないのだと思います。

――無計画な観光客の増大は、地域の文化や自然資源などに好まざる変容をもたらすこと、資源を疲弊させるほどに観光客が増えているにもかかわらず地元への経済効果が発揮しきれてい

石森秀三（いしもり しゅうぞう）
北海道博物館長。国立民族学博物館教授を経て、2006年に北海道大学観光学高等研究センター長に就任（2007年から大学院観光創造専攻長）。小泉内閣の観光立国懇談会委員として日本の観光立国政策を理論的に支える。観光革命、観光ビッグバン、自律的観光、文明の磁力など新しい概念を提唱し、日本における総合的観光研究をリード。2013年からは北海道開拓記念館長（2015年より北海道博物館）。

ないこと、旅行者の満足度を阻害することなど、さまざまな課題があることが分かりました。

（注）地域経済分析システム（RESAS）産業構造や人口動態、人の流れなどの官民ビッグデータを集約し可視化するシステム。経済産業省と内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局が提供。

地元の人たちの関与が個性を守る

斉藤　地域の人たちと観光客の関係がうまくいっていると僕が思うのは、熊野古道です。最近、外国人を連れて高野山から那智大社まで5日間歩いたのですが、彼らも神聖な場所であると理解し、マナーについて自分から進んで学びたがるんですね。

今はもう違うと思いますが、東海自然歩道は25年前に歩いた時、正直あまりうまくいっていないと感じました。それは地元の人が東海自然歩道の存在を知らないというのが一番大きくて、道を聞いても、「そんなのがあるのか、知らなかった」と言われ、白けてしまうことがありました。

熊野古道で地域と観光客との関係がうまくいっているのは、「おらがまちにはこういうものがある」と地域の人たちがちゃんと知っていて、誇りを持っているからではないかと思います。

青山　ある時、旅番組をご覧になった方から、「素敵な村だと思って行ってみたけど、話しかけても素っ気なくて、全くいい印象がなかった。テレビの前だから愛想がよかったんじゃない」と言われました。訪れるのは個人の農家の方や、お店、工場など生活の場でもあります。忙しい時や、果物畑に入って記念写真をとったり、いきなり庭先へずかずか入ってこられても、いい顔できませんね。お互いに様子を感じとりながら、お邪魔させていただく、というお互いの気遣いの中で、良い出会いや発見ができると思います。また、迎える地域の側も、信念やポリシーもってお迎えいただき、旅人にもさりげなく伝えてほしいんです。そうすれば敬意をもって「地域流」を学びながら、楽しむことができるはずです。地域の流儀を観ることも旅の醍醐味ですからね。よく「ごみが落ちているところには、みんながごみを落とす」といいますが、ポリシーがないまま、急にたくさんの観光客を受け入れてしまうと、荒らされやすいという面もあるのではないでしょうか。

熊野古道

斉藤　フランスとスペインを結ぶカミノ・デ・サンティアゴの巡礼路や、お遍路巡りの四国八十八ヶ所霊場などの巡礼系の道は、地域に根差していると同時に、地域の方たちがよそから訪れた人を快く受け入れ、さりげなくもてなしてくれますよね。

訪れた人は地域の人から気持ちよく受け入れられ、いい気持ちになってまた行こうと思うし、受け入れる地域の人たちは気持ちよく来てくれる人がいるから、次に来た人たちにもより親切にする。持続可能性ということで

四国八十八ヶ所霊場

サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路

言えば、巡礼系の道ではその循環が「持続」し、うまくいっているのだと思います。

――アメリカのロングトレイル、アパラチアトレイルにも、ところどころにハイカーたちをサポートするトレイルエンジェルという人たちがいると聞きます。

このように、地域の人と訪れる人のつながりがしっかり作られていることも持続可能性に重要な視点かもしれません。

持続可能性は「よき旅人」の育成から

斉藤　ヨーロッパには、歩く旅を楽しむ道が各国にあります。お金持ちの旅行者も貧乏な若者の旅行者も歩いているのですが、スイスのオートルートを歩いたとき、道沿いにバックパッカー向けのホテルがあると聞いて言ってみたら、外観はかなり立派なホテルでした。

「え?」と思いつつ入ってみたら、屋根裏部屋を1泊5ユーロくらいで泊まれるバックパッカー用の相部屋にしているんですね。他の階は100ユーロくらいの部屋で、1軒のホテルの中に安く泊まれる部屋と、それなりのお金を払う人のための部屋が両方あるわけです。

お金がない若い人のハードルをできるだけ低くして受け入れ、年を取ってからまた来てもらっていい部屋を利用してもらえればよいという考えでしょうね。日本ではそういう考えのホテルはなかなかないですが、あったらすごく嬉しいなと思いました。

石森　今、若い人に対するハードルを下げるという話が出ましたが、自分自身のことを考えても幼い頃の旅の思い出は結構残っています。旅で未知なるものと出会うことで学ぶことは多い。子どもたちにとって旅する経験はとても大切だと感じます。シェルパさんの話はぜひ子どもたちに聞かせたいですね。

斉藤　子どもたちに向けて講演することがありますが、僕が旅を続けているのは、旅は思い通りにならないからで、それは人生も同じなんだよ。だから旅は行く価値があるといつも言っています。

先日、19歳の息子と北海道をオートバイで回り、最後に彼は一人で旅をしたのですが、何が面白かったかと聞いたら、「自分で決めた結果が全部自分に返ってくること」だと言っていました。「自分が成長して、かっこいいという気持ちになれた」と。旅を通じて、そういう感覚を持つことはすごく大事だと思いました。

――自分の行動や判断に責任を持つことはかっこいいことだと感じ、そのきっかけが旅だったということですね。

青山　仕事とはいえ、人間として大切な気付きを得る機会をもてたことは幸せでした。ただ、最近は親御さんの世代でも旅慣れしていない人が多くなり、子どもを旅行にうまく連れていけなかったりすることもあるようですね。

斉藤　もう10年ほど前ですが、ある親子に「たき火をしていいよ」と言ったら、お父さんがライターでまきに直接火をつけて「つかないね」と（笑）。親がたき火をしたことがなければ、子どもができるわけがないんです。旅も同じで、親が経験していなければ、子どもには伝わらないですよね。

石森　日本の子どもたちの未来を考えると、私が非常に危機感を覚えるのが、7人に1人が直面していると言われる子どもの貧困です。貧困状態になると、旅に出る機会が当然少なくなります。しかし、子どもにとって旅は非常に大切な経験なので、「食育」が確立されているように、「旅育推進法（仮称）」を制定して、「旅育」推進を国民的運動にし

シェルパ斉藤（しぇるぱ さいとう）

紀行作家。1990年に雑誌『BE-PAL』に東海自然歩道を踏破する紀行文を連載。以降、アウトドア雑誌を中心にさまざまな紀行文を発表。講演やラジオ、テレビ出演などを通じてトレイルを旅する魅力を発信している。1995年に八ヶ岳に移住。「シェルパ斉藤の行きあたりばっ旅」「犬連れバックパッカー」など著作多数。

ていくべきです。

――皆さんのお話をうかがっていて、受け入れ側の問題だけでなく、「よき旅人」を育てることも観光の持続可能性にとって重要だと感じました。さて、長期的な視点から持続可能な観光を考えた時、今後どのような取り組みが必要でしょうか。

斉藤　僕はマスではなくミニマムが重要で、たくさんの人に来てもらうのではなく、来てくれた一人の方を満足させることを考えることが大事だと思います。来た方の満足度が高ければSNSのおかげで、その土地の良さが広がっていくと思いますから。それには地域の人が自分の暮らす場所に誇りを持ち、他にはないものを見せることが大事だと思います。

青山　私はサービスや食などについて、訪れる人に地域が迎合しすぎるとつまらないと感じます。独り善がりでは旅人も共感できないかもしれませんが、その土地ならではのこだわりなど、普段見られないものに魅力を感じると敬意を払いますし、自然にその土地のルールを守れる気がします。

さっきスイスの話が出ましたが、スイスにはいろいろな国から多くの観光客が来ていますよね。でも、おもてなしの「根っこ」がしっかりあって、自分たちのルールや山の自然、生活をちゃんと守った上で観光客を受け入れているように思います。

今は、日本もインバウンド戦略も数から質へとシフトしました。ただ富裕層をターゲットにするだけではなく、日本の文化や良さを理解してくれる日本のファンをきちんとお迎えするという原点に今一度立ち返り、地に足をつけた取り組みが日本の持続的な観光立国につながると思います。

石森　私は人育てに尽きると思います。北海道でも観光分野で頑張りたいという若い人は少なくないのですが、そういう人を育てるシステムが十分に機能していません。北海道のインバウンドが増える一方で、観光の専門的な人材は十分に育っていません。これは早急に手を打たないといけないと思います。

その点、北海道の野口観光は来年4月に「野口観光ホテルプロフェッショナル学院」を開設します。これは2年制の職業訓練校で年間に30名を育てます。素晴らしい試みなので、ぜひとも成功してほしいと期待しています。

――今日は「旅と持続可能性」というテーマについて、旅との向き合い方を軸にして、有意義なメッセージをいただきました。とかく持続可能性の概念を地域資源管理の中のみに見出そうとする私にとって、気づきの多い場となりました。どうもありがとうございました。

編集協力：井上理江

寺崎竜雄